

在所にて承候迄の旨申候。八十一の女は悉く白髪、齒も不
殘落申候旨物語也。

一、仁道至大の義

先日藤太夫迄御越候論語廣義の中、御疑義見申候。藤太夫
殿迄愚意有増申入候。就中仁道至大をすぐに全体不息の義
と御申越候。惣て仁道と申時は、皆用へ懸り申儀にて候。
且又至大の語も体にて申儀にては無之候。君子務本の章に
も、仁道從此而生など其通にて候。先日藤太夫殿へも申入
候通り、仁道至大は一貫にて申上候貫なり。全体不息は一
なり。かやうの所貴殿被讀書候事、餘り窮索に過候故、所
見狭迫に罷成候氣味毎度見え申候。是は讀書の害に成候
間、被付氣様にと存候。又子貢知一知二の章、其機云々と
申所、賢意被申越候。是は最前よほど工夫の上に相定申候。
只一通り進而不已して性与天道を聞くに至ると申にても
無之、目知明なる所に終には性与天道を聞くの機有之候。
申さば進而不息の機にて候。機字を和語にていかゞ心得可
申や、適當の諺を得不申候由、去年奥州の書生岩淵孝七郎と
申者に申候へば、はずみと申俗語に似申由申候。なるほど

其通りと存候。是にて孝七郎明敏を察し申候。此人の儀は
定て藤太夫より可申參候。難得人にて候。去共遠僻に罷在
候て、師友の益無之由、殊の外くやみ候て申越候。享保八年二
月四日大地
品言へ御寄書也。岩
淵生後更姓陸氏。

一、水戸光圀の墓誌

先生常州水戸産也。其伯疾。其仲夭。先生夙夜陪膝下。戰々
兢々。其爲人也。不滯物不著事。尊神儒而駁神儒。崇佛
老而排佛老。常喜賓客。殆市于門。每有暇讀書。不求必
解。歡不歡歡。憂不憂憂。月之夕。花之朝。斟酒適意。吟詩
放情。聲色飲食。不好其美。第宅器物。不要其奇。有則隨
有而樂膏。無則仕無而晏如。自蚤有志于編史。然罕書可
徵。爰搜爰購。求之得之。微遜以裨官小說。據實闕疑。正
閔皇統。是非人臣。輯成一家之言。元祿庚午之冬。累乞骸
骨致仕。初養兄子爲嗣。遂立之以襲封。先生之宿志於是
足矣。既而還鄉。即日相攸瑞龍山先室之側。瘞歷任之衣冠
魚袋。載封載碑。自題曰梅里先生墓。先生之靈永在於此矣。
嗚呼骨肉委天命所終之處。水則施魚鱉。山則飽禽獸。何用
劉伶之錘乎哉。其銘曰

月雖隱瑞龍雲。光暫留西山峰。

建碑勒銘者誰。源光國字子龍。

水戸前中納言光國墓誌銘

先生姓源。諱光國。字子龍。號梅里又號常山。威公第三子
也。母谷氏。寬永五年戊辰六月十日。產常州水戸。六歲立爲
世子。明年謁大樹。直叙從五位上。歷從四位下。左衛門督。
從三位。左近衛中將。年三十四襲封。食二十八萬石。拜參議。
中將如元。元祿三年庚午之冬致仕。翌日拜權中納言還鄉。
營兆域於瑞龍山側。瘞歷任之衣冠魚袋。建碑自書曰梅里
先生墓。其陰勒銘以見其志。暫考繫于西山。候終焉之期云。

一、奥村庸禮自書葬斂之法

天和辛酉之歲、我執政奥村壹州庸禮、自書葬斂之具、以貽嗣
男德輝如左。
一、疾病にして息絶る節、成程物靜にして居處の邊人音な
き様に可仕。

一、息絶て新しきござだゝみ一疊、其上に新しき蒲團を鋪、
病中著候小袖を取り、新しき小袖を著せ、右のござ疊の
上へ移し、東首にあふむけねさせ、新しき小袖をかけ置

可申候。

一、復の儀法の如くには成まじく候間、闕候も尤の事。
一、沐浴の具新しき手洗・水汲桶等拵へ、家の外にて湯を
湧し候事。

一、沐巾・浴巾二共新、白き湯帷子并新しき櫛・もとゆひ等
拵へ、沐には沐巾にて拭き、浴には浴巾にてふき可申事。
沐浴の湯水等は穴をほり其内へ捨可申候。沐浴の器は焼
捨べし。

一、二日に右の如く沐浴し、常の如く髪を結び、新しき下
帶常の如く結び、白小袖二つ皆右まへに着可申候。
一、帯は白羽二重一重廻りにくけ、かな結びにいたし、綿
は不可入。

一、慎目中とて白羽二重一尺二寸、四方二重に縫ひ、兩角に
紐を付、顔の眞中にあて、額の通り後にてしかと結び、
顔を隠し可申候。

一、飯含とて洗米少し、錢二文、口の内で入含ませ可申候。
一、充耳とて綿にて兩耳へ入ふさぐべし。
一、握手巾とて手覆、白羽二重長一尺二寸に合せ縫ひ、四